様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６２８４０２１

研究課題名（和文）未完の記譜法：創造の為のアーカイブの実践的研究～言語･身体･イメージから

研究課題名（英文）Notation as creative process: an analysis of body action, image and language

研究代表者
高橋　悟（Takahashi, Satoru）

京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・教授

研究者番号：３０５１５５１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,300,000円

研究成果の概要（和文）：「Notation.記譜法」とは、一般には、楽譜など芸術諸ジャンル内の「行為の記録」と「再生の指示」を行うものとされる。本研究では、厳密なスコアに加え、道具、地図、 模様、庭園、詩、映画、建築、ダンス、遊技などを含めた「言葉･イメージ･身体に運動を起こす記譜法」の構築を目指した。それらを言葉･イメージ･身体に運動を起こす流動的な「装置」として広く記譜を捉え直し、「行為の記録」と「再生の指示」にとどまらない「領域横断的な創造的行為としての記譜法」という新たな可能性を探求した。成果の還元としては実験的な展示や公演を中心に進め、従来の芸術の記録や作品展示とは異なる新たなモデルの提示となった。

研究成果の概要（英文）：In general, the term “notation”, in a musical sense, can be defined as a process of recording actions and also as a set of instructions that can be re-played. As such, it implies a strict adherence to order, like a musical score. By expanding this definition of “notation”, this research aims to re-conceptualize “notation” to mean an interdisciplinary creative process through an analysis of body action, image, and language. The objects of this analysis include playground equipment, maps, patterns, garden, poem, cinema, architecture, play and dance. In addition, experimental exhibitions and performances were organized as a part of an academic symposium for a wide audience ranging from specialists to ordinary citizens.

研究分野：現代アート

キーワード：現代アート　アーカイブ　環世界　記憶　脳科学　記譜　身体行為　多感覚

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、芸術経験の認識のプロセスについて身体･運動図式と記憶の関係から考察する研究を進めてきた。身体･運動図式と記憶への着目は、「医療環境に於ける芸術的アプローチ」として 2002 年より 2007 年までの期間に米国ミシガン大学で行った認知症患者を対象とした研究教育プロジェクトに端を発する。プロジェクトで特に注目されたのは以下の三点である。第一に、認知症患者の多くが、近い過去の記憶を想起できないにも関わらず、幼いころの記憶を呼び戻すことができること。第二に、記憶に重大な困難が出てくる前段階として、道に迷うなど、空間把握に問題が出てくること。第三に、道具･楽器などの特定の動作や、住み慣れた環境などが、特定の情動を伴う記憶を呼び覚ますこと。これら三点の関係から、行為･運動を誘発する事で、特定の情動を伴った記憶を引き出す装置としての作品制作の可能性を探った。イメージ･言語･身体の関係から記憶を考察した上記の研究は、「行為の記録」と「再生の指示」を体系的に取り扱い、空間･場所、あるいはトポスにイメージを関係づける手法として mnemonics いわゆる「記憶術」の文献調査へと展開すると共に、楽譜、舞踊譜、図面など芸術諸ジャンルに於ける「書き記す事」と「読み表す事」に関わる「Notation.記譜法」の着目へと研究を導く事になった。「記憶」に関しては、「芸術のアナザーモデル」基盤研究―B に於いて複数の感覚の交通とイメージ･記憶の形成過程の関係について検証し、「記譜」に関しては「移行の共生デザイン」基盤研究-C に於いて、記譜を書きとめ･読む行為とイメージ･音を結ぶ共感覚の関係について考察した。今回の研究では、記憶、記譜での研究で得た成果を統合的に捉え、厳密なスコアを有したものだけでなく、道具、数え歌、地図、 模様、庭園、写真、詩、映画、建築、ダンス、遊技さらに作品それ自身も言葉･イメージ･身体に運動を起こす流動的な「装置」として広く記譜を捉え直し、「記録」と「再生」にとどまらない「領域横断的な創造的行為としての記譜法」という新たな可能性を探求することになった。

２．研究の目的

「Notation.記譜法」とは、一般には、楽譜、舞踊譜など芸術諸ジャンル内の「行為の記録」（書くこと）と「再生の指示」（読むこと）を行うものとされている。本研究「未来の記譜法～創造の為のアーカイブの実践的研究」に於いては、厳密なスコアを有したものだけでなく、「言語･身体･イメージ」に運動を起こす流動的な「装置」として広く記譜を捉え直す事で、「記録」と「再生」にとどまらない「領域横断的な創造的行為」としての記譜法の可能性を探求する。多様な感覚･技術の交通という視点からの記譜へのアプローチは、読む、書く、視る、聴くという従来の諸ジャンルに固定された「鑑賞形態」や、歴史的文脈内に於ける「作品」「作者」概念、「資料体」の場を転移し「創造的誤読」へと導くアーカイブの再構築と新たな理論･制作の実践となるであろう。

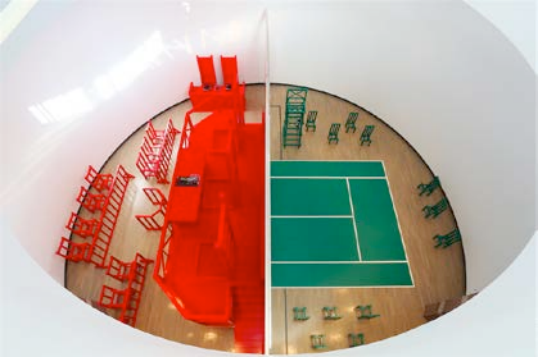
３．研究の方法

「領域横断的創造としての記譜」をテーマに、１）記譜の認識、 ２）歴史的発展 ３）関係性の再構築という３プロセスの解明を目指した本研究では、A)収集･調査･再配置班 B)制作･実験班 C）理論構築･総合的検証班の 3 研究班からなるチームを編成した。各班のメンバーは、芸術学、脳神経科学、哲学、音楽学、学芸員、美術家、詩人からなり、「言語」「身体」「イメージ」という三項を主な媒介にする事でジャンル横断的な検証を可能にする。各班チームリーダーは、互いの成果を歴史的、科学的、哲学的、芸術的見地から相互批判的に再検証しつつ、実験･資料編成･理論構築･創作へと展開し、その成果を出版や

国際シンポジュームに加え、歴史的建造物、公共空間、美術館などを使用した実験的で体感できる手法で広く公開した。

４．研究成果

□「法と星座　Turn Coat / Turn Court 」プロジェクトをヨコハマトリエンナーレ 2014 で行った。上記のプロジェクトは、1983 年から 1985 年に京都アンデパンダン展で展示された Court シリーズ（林剛＋中塚裕子）を「創造行為を誘発する記譜」として捉え直したものであり、美術に於ける「視ること・話すこと」の位相を変えて身体・領土・健康・安全の再配置を試みる実験でもあった。それは、政治哲学の分野で使用されてきた「身体を貫通する権力」と「行為の記録・再生の指示」として芸術諸ジャンルで個別研究されてきた「記譜」との関連から捉える試みでもある。

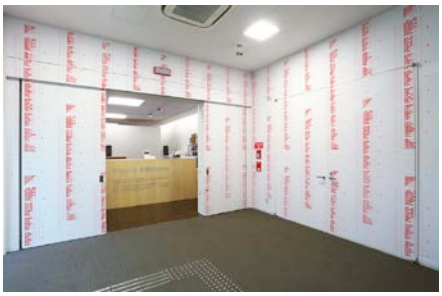


□「装飾と犯罪　Sense / Common」

「法と星座」からの展開となるプロジェクトを PARASOPHIA 京都国際現代芸術際 2015 で実施した。京都市美術館を使用した大規模の展示であり、建築、庭園、地図、映像、音声など複数のメディアを駆使し、読む、観る、歩くという行為や動作が、多様な系列で生起する多層的空間の創造を目指したものである。展示期間中は、鑑賞する場としてのみではなく、多様な相互作用が生まれる場としても美術館を活用する為に、複数プログラムの開催やシンポジュームへの参加も行った。

また美術館アーカイブの創造的な誤読の実践としては、写真家ヘンリータルボットの著書「自然の鉛筆」（1844-46）から導かれるキーワードに基づき、美術館の収蔵作品を選び、再配置する構想を展示へと発展させた。

□大学移転プレ事業の一環として開催した「still moving:on the terrace」展（京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、2016 年 4 月 16 日から 5 月 29 日）は、「terrace」というコンセプトを函数として既存のギャラリー空間の誤用としての「読み替え図・記譜」（例えば、吹き抜けスペースは会議室、階段は劇場、可動壁面はホテルなど）を作成し、これを参加メンバーに割り当てた。これら図・記譜は、必ずしも固定化したものではなく、誤読も可能である。例えば、エレベーターとトイレを展示室に、可動壁をホテルに誤用するという指示であったが、制度の文脈とも重ねるために、エレベーター＝学長室＝工具箱、可動壁＝芸術資料館、トイレ前のホワイエ＝崇仁アーカイブズ（崇仁祭りのお囃子の譜面を壁紙にし、その前を崇仁小学校に設置されていた二宮金次郎像の複製が徘徊する。）へと誤読するなど。通常の展覧会におけるキューレーション、会場構成、作品配置とは異なり、従来の役割分担（キューレーション、デザイン、作家、事務職など）の「誤配」による不安定な場の生成が可能となった。



□「Re-Play/未完の記譜法」と題したプロジェクトを核とした実践的な研究を行った。本研究は、身体行為を誘発する装置としての記譜という観点から開始したが、今回の試みは「展覧会」という形式それ自体を記譜として捉え直すものである。これは、東アジア文化都市 2017 京都「アジア回廊」との特別連携企画でもあった。観光客が集う二条城と京都芸術センターを結ぶ東西軸が、東アジア文化都市企画の主軸となったが、それらとは異質な視点を設定する為に、元崇仁小学校の体育館を使用し、南北の軸を形成する事を試みた。京都芸術センターでは初の試みとして運動場の展示使用を許可し、日独仏の若手建築家による「かげろう集落」展（2017 年 8 月 26 日から 9 月 3 日）が、7 日間の期間のみ開催された。それは街の中央に「原っぱ」のような自由な場を仮設的に産み出す試みだが、展示物としてのパビリオンは、期間終了後は廃棄される予定であっ「Re-Play/未完の記譜法」ではそれらを元崇仁小学校の体育館へ移設し「集団の身体相互行為を誘発する実験装置」として捉え直す企画へと転位させた。それは京都市内の明倫学区から崇仁学区への南北の移動が、ヒトのフルマイ自体をどのように変更させるかを検証する実験ともなった。また映画制作ワークショップ「トポグラフィックシネマｘシネマチティックボディー」を開催し、芸術センターから移動させた建築が多様な表情で見えるような演出をおこなった。照明、スモーク、音響に加えて、小型ドローンや OSMO など複数のカメラを使用し、そこからの多角的視点をライブ映像でスクリーンに投影したもので、ダンサーなどの身体行為を見せるのではなく、参加者がカメラをもって移動することで、かれらの視点と身体の移動そのものが、パフォーマンスともなるという実験となった。

上記の諸活動に共通するのは記譜という概念を再演を目的とした記録方法や、芸術の記

録として扱うのではなく身体・言葉・イメージを通じて行為を誘発する装置として扱うということであった。特に留意したポイントは、時間や空間を所与のものとして扱うのではなく、行為とともに開かれ産み出される未完の状態として扱うことであった。そのため芸術のジャンルや研究の専門領域を横断するアプローチが要請されることにもなった。作品を記譜という視点から考察する本研究の次へのステップは、異なった時間や場所のモンタージュから生まれるズレから生じる多元的な歴史への接近方法である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計 7 件）

① 高橋悟　「FarAway So Close 距離へのパトス」京都市立芸術大学研究紀要
査読無 VOL62　P11-P15　2018

② 高橋悟　「未完の記譜法：言語・身体・イメージに運動をおこす装置」
京都市立芸術大学芸術資源研究センターニュースレター
査読無　vol3　P7　2017

③ 高橋悟　「Still Moving : On the Terrace」
京都市立芸術大学研究紀要　査読無
VOL61 P３-P15　2017

④ 牧口千夏　フローリアン・ブムヘスル
京都国立近代美術館　Cross Section
査読無 VOL8　P46-P53　2017

⑤ 牧口千夏　写真の原点再考

京都国立近代美術館　　Cross Section
査読無　VOL8　P62-P69　2017
⑥　建畠哲　草間彌生　我が永遠の魂
査読無　ユリイカ３月号 P35~P43 2017
⑦　高橋悟　『Sense/Common : 装飾と犯罪』
京都市立芸樹大学研究紀要　査読無
VOL60　P79から P81　2016

〔学会発表〕（計 10　　件）
①　2017 年 4 月～2018 年 2 月
牧口千夏　展示企画「泉 1917 から 2017」
京都国立近代美術館
②　2017 年 9 月 23 日～2017 年 11 月 5 日
高橋悟　　展覧会　Re-Play 未完の記譜法
元崇仁小学校の体育館
③　2016 年 08 月 25 日～2016 年 08 月 25 日
建畠哲　音で描く~オープニングトーク
LADS Gallery
④　2016 年 04 月 02 日～2016 年 05 月 22 日
高橋悟　展覧会企画「Still Moving :On the Terrace」
⑤　2016 年 04 月 02 日～2016 年 05 月 22 日
牧口千夏 展覧会企画「オーダーメイド：それぞれの展覧会」
京都国立近代美術館
⑥　2016 年 05 月 22 日～2016 年 05 月 22 日
高橋悟「Wikipedia Arts:コレクションとキューレーション」
Wikipedia Arts　京都国立近代美術館
⑦　2014 年 05 月 03 日～2014 年 05 月 03 日
牧口千夏
展覧会企画　映画をめぐる美術:ブロータースからはじめる
東京国立近代美術館
⑧　2015 年 03 月 08 日～2015 年 05 月 10 日
建畠哲　公演会　義太夫 DE 現代詩
京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
⑨　2015 年 03 月 07 日～2015 年 05 月 10 日
高橋悟　展示「装飾と犯罪 : Sense/Common」
展覧会：京都国際現代芸術祭 Parasophia
京都市美術館
⑩　2014 年 08 月 01 日～2014 年 11 月 03 日
高橋悟　展示「法と星座：Turn Coat/Turn Court」展覧会：横浜トリエンナーレ 2014
横浜美術館

〔図書〕（計 3 件）
①　篠原資明　吉田山百人一晶
七月堂　120 ページ　2016
②　河本信治・高橋悟
展覧会カタログ「京都国際現代芸術祭 2015Parasophia」
京都国際現代芸術祭組織委員会
350 ページ（p260-p265）2015
③　森村泰昌・高橋悟
展覧会カタログ「華氏 451 の芸術・横浜トリエンナーレ 2014」平凡社
２０１４　365 ページ(p143-p148, p322-3p23)

〔その他〕
ホームページ等
法と星
http://www.temporaryfoundation.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋　悟（TAKAHASHI, Satoru）
京都市立芸術大学・美術学部／美術研究科・教授
研究者番号：30515515

(2)研究分担者
篠原　資明（SHINOHARA, Motoaki）
京都大学・人間・環境学研究科・名誉教授
研究者番号：50125217

牧口　千夏（MAKIGUCHI, Chinatsu）
独立行政法人国立美術館京都国立近代美術館・学芸課・主任研究員
研究者番号：90443465

建畠　哲（TATEHATA, Akira）
多摩美術大学・その他・学長

研究者番号：90443465

(3)連携研究者
下條　信輔（SHIMOJO, Shinsuke）
玉川大学・付置研究所・研究員
研究者番号：70183837